それは彼女の物語

油揚げ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それは彼女の物語

【Ｎコード】
Ｎ７２８７Ｙ

【作者名】
油揚げ

【あらすじ】
死の螺旋に囚われた世界スピラ。
その螺旋を解く為に一人のアルベド族の少女と失われた祈り子が立ち上がる。
いったい彼女達はどんな物語を紡ぐのか。
今、物語のページが開かれる……。

あたしはこの世界を変えたい（前書き）

今更ながらファイナルファンタジー１０の小説が書きたくなり投稿してしまいました。
別の作品を週二投稿を己に課しているため、こちらの投稿は不定期一カ月に一、二回程度になってしまいますが、読んで頂ければ幸いです。

あたしはこの世界を変えたい

リアニ。
それが彼女の名前。
金髪、渦巻く瞳。
スピラにおいてエボン教では迫害を禁止されているにも関わらず、裏では迫害を受ける亜人種、アルベド族の少女。
アルベド族はエボン教での教えで禁忌とされる機械を使い迫害を受け続けていた。
だが、なにも彼らは自分たちの為に機械を使い続けているわけではない、彼ら心はただ一重にこの世界を平和にしたいそれだけだ。
この世界を千年にも渡って苦しめる存在を打倒して。
超弩級の大きさ、空間をも歪める重力を操る能力。そして何度倒しても蘇る不死性をもつ魔物。
シン、このスピラを脅かすものの名前であった。
アルベド族が機械を発掘、修理し使うのはこの魔物を倒すためであった。
なのにそんなアルベド族が迫害されるのは先に述べたエボン教での教えからであった。
シンは機械文明を嫌い、発展した都市、人口の多い都市を襲うという習性があるという。故にシンがこのスピラに現れたのは機械に頼りきった人間への罰だと言われている。
故にエボン教では機械の使用を厳しく禁じ、人の罪が贖(あがな)われた時に、人の罪の象徴のシンはその姿を消すと説いていた。
最初にエボン教が発足した時はその考えに賛同するものはほとんど居らず、各国の機械兵器があればシンは倒せるものだと皆が思っていた。それに便利な道具を今更手放す事にも当時の人達は抵抗があった。彼らからすれば、エボン教はシンという脅威を目の前にして適当な事を並べ立てて救いを求めるカルト集団としか周りの者達は

認識していなかったのだ。
しかし、それもやがては払拭された。
多くの命という対価を払って。
シンはエボン教の教えを証明するように、機械文明を次から次へとその圧倒的な戦闘力を見せつけながら滅ぼしていった。
当時の者達が期待した各国の機械兵器もシン討伐に駆り出されたが、無駄の一言に尽きた。
確かにシンを傷つけること自体はできたが、とても倒すには至らない。むしろそれは逆にシンの怒りを買い、兵器もろとも国を滅ぼされた。
やがて、小さな集落や文明レベルの低い物よりも文明レベルが高いものを優先して襲うというその習性は多くの犠牲と千年という途方も無い時間により証明された。
そしてエボン教は今日ではスピラに住まうほぼ全てのヒト、そしてロンゾ族やグアド族といった亜人達にも浸透していった。
だが、この広い世界スピラ全土で信仰されるエボン教に対しアルベド族はその教えに懐疑的であった。
人の罪の象徴であり、人に罰を下す存在なら何故、エボン教では召喚士によるシンの討伐を許可しているのか？
エボン教の教えが真に正しいなら、人はその罪を受け入れ、あえてシンの攻撃にその身を差し出すべきではないのであろうか？
機械にこそ頼らない召喚術による討伐も人が罪を受け入れないから抗っているとシンが判断したら駄目なのではないか、そもそもシンが人の罪を罰する存在というのも確かな証拠は無い。
故に彼らはエボン教を信じない。だが、同じくスピラでシンの脅威に晒される仲間の彼らを傷つけることはしない。
例え、自分達が迫害されようとも、アルベド族は己の信ずる道を行く。
シンが居ない世界の為に、召喚師達だけに理不尽に業を背負わせることがないように。

それを胸に少女は自らの家を飛び出した。
機械でなんとしてもシンを倒すと主張する父に反発し、妹が引きとめようとする声も無視して家を出た。
父の言うことも分かるが機械だけに頼ったやり方は、頼るものを変えただけで究極召喚に頼ったやり方と対して変わらない。
機械だけ勝てないのは千年前より証明されている、だが究極召喚で倒したとしてもシンは幾度となく蘇ってきた。
だから、お互い歩み寄って新たな戦いをすべきとリアニは父に申し出た。
種族として自立心が極めて高いアルベド族は他の亜人種よりも早く大人達に認められるが、リアニはそれらを上回る程、知的で合理的な思考を幼くして開花させていた。
そんな彼女が出した結論は自らが召喚師となるという道だった。
極論だがエボン教は機械をアルベド族を理解しない、アルベド族は召喚術をエボン教を理解しない。
お互いに大まかには知ってはいるが、遥か昔、交流がもっと親密だったころはいざ知らず、今は互いに知っていることなど過去の受け売りに過ぎない。
ならば再び歩み寄るべきだと、当時のリアニは考えたのだ。
だが、彼女の父はリアニが召喚師になることに激しく反発した。召喚師の行きつく先は役目を終えての栄光の死か、志半ばでの無様な野垂れ死にか、あるいは辛い修錬から役目を放棄し一生後ろ指を指される生活の救いの無い道のみ。
人の親なら誰でも、我が子にそんな辛い道を歩んで欲しくなどないであろう。
リアニの父も激しく反対し、怒鳴りつけた。
しかし、自立心に溢れた彼女に父のそれは逆効果であった。
いつの間にか荷造りした荷物を抱え、少女は父の制止を振り切り、広い世界へと飛び出した。

ビサイド。
聖都ベベルから遥かに離れたスピラ南端に位置する小さな集落。
召喚獣ヴァルファーレを祭ってはいるものの、大した産業も無く、漁業でなんとか成り立っているような集落の為、たまに祈り子に祈りを捧げるために訪れる人が来る程度なので酷く寂れた集落であった。
なにせここ数十年シンの襲撃どころか姿でさえ見なくて久しい。
シンは人が多い所、発展した町々を優先して襲う。皮肉にもシンに対抗する手段が全くないこういった小さな集落こそ逆に襲われないのだ。
その小さな集落には似合わない、大きな建物が村の奥に建立されている。
それこそがこの世界でも十にも満たない召喚獣の一体ヴァルファーレを祭ったビサイドの寺院である。

その寺院から一人の少女がぐったりとした面持ちで現れた。
Tシャツのような上着に、膝上まであるスパッツ、腰にはマントの様に広げられた紅い腰布といった服装。
髪は頭の後ろで一つに纏めた所謂ポニーテール。
瞳の色はエメラルド。
そう彼女こそ数年の召喚師の修行を終え、晴れてヴァルファーレの契約の儀式を受ける許可を得たリアニその人であった。
数年の後に背もすっかり伸び、成人と変わらぬ身長、体も女性らしく成長を遂げていた。

だがそれよりも、変わったところが一つある。
それは彼女がちょっとした所作をするたびに動く髪であった。
アルベド族特有の煌めくような金髪が見る影も無く夜闇のごとく黒く黒く染まっていた。
数年前、勢い良く家を飛び出して召喚師になろうとするもののアルベド族であるというだけで世間の目は厳しかった。
子供に罪は無いと食事を分けてくれる人がいる一方、寺院の関係者に近いほど、アルベド族に対して激しい嫌悪感をむき出しにするのだ。
罪を悔い改めないアルベドと、スピラの全てを背負って戦う召喚師を会わせるわけにはいかないと、言葉で言ってくれればまだいい方で、食い下がろうとした時などは僧兵に棒で打たれたこともあった。
なんとか旅の途中であった召喚師に弟子入りを頼んだ時など。

「ふん。アルベド族など弟子したくもない。とっと消えろ」

といってにべも無く断られた。
ただアルベド族だというだけで……。

何度かそれを繰り返すのち、彼女はあてどもなくスピラをさ迷っているだけであった。
今更、家には帰れない。
だが、そんな彼女は故郷から遥かに離れたミヘンの土地で一生の恩を与えてくれた女性と出会う。
彼女はリアニがアルベド族と知った上で召喚術を一から指導してくれたのだ。
彼女自身はシンの討伐を諦めた者ということで嫌悪する人もいたが、そんな視線や評価はものともせず後進の育成に力を注ぐ高潔な女性だったのだ。
そんな彼女からの手ほどきを得ること数年。

やっと召喚獣との契約を許可されたというのに……。
アルベド族というのを隠すために自慢の髪を黒く染めてまで寺院へ入る許可を得たというのに……。
彼女は

召喚獣の契約に失敗した。

「……う」

泣くまいと誓ったはずなのに、ポロポロと涙が溢れて止まらない。

「やっぱりわたしがアルベドだから？……だから召喚獣もわたしと契約してくれないの？」

師匠である彼女から出会ってからはほとんど浮かんでこなかった感情が重しを解かれたように次から次へと浮かんでくる。
そして足からリアニは崩れ落ちた。
並みの召喚師でも契約には一日程かかると言われている中、彼女は三日もその契約に力を注ぎこんでいたのだから無理もない。
むしろそこまでやって死ななかったことが褒められるほどの偉業だ。
だが、そこまでやってもリアニと召喚獣は契約してくれなかった。
溢れる涙そのままにリアニは寺院の前で気絶した。

「う……ここは？」

リアニは目を覚ますとゆっくりとその身を起こした。

「気が付かれましたか？二日も眠りっぱなしだったんですよ？」

「二日も……」

リアニが目覚めた事に気付いた青年。服装からするとおそらくシン討伐隊の一員だろう。

青年の放った言葉の二日と言う単語になんとか反応するが、二日も眠っていた為か、いまいち頭に血が回っていないリアニ。

「どうですか気分は？」

「いえ、特に……っつ」

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、すいません。だ、大丈夫です。ちょっと頭痛が……」

自分を気付かってくれる青年の言葉に体の様子を確かめる様に動かした瞬間、頭痛が彼女を襲う。

痛みに頭を押させていると不意に、何故自分がここにいるのかを思い出した。

否。思い出してしまった。召喚獣との契約に失敗してしまったことを。

次の瞬間、溢れる様に涙が次から次へと瞳から流れ出す。

「私は……そうか……契約に失敗し……うぅ……う」

「ど、どうしました？」

突然女性が大粒の涙を幾つもいくつも溢れさせたのだ。

シンの討伐隊と思われる青年も目を剥いて驚きの声をあげる。
こんなところを誰かに見られでもしたら、良からぬ噂が立ちかねない。

「す、すいません……ちょっと一人にしてもらってもいいですか？」

堪えようとしてもまるで自分の意思を受け付けないように涙腺は次から次へと玉のような涙を流し続ける。……あるいはリアニが心から涙を止めたいと思っていないのかもしれない。なんせ親元を無理に離れ、迫害を経験し、数年という月日をかけたものが全て無駄になってしまったのだから。
リアニの言葉に、心配そうな顔をするものの青年はリアニの言葉を尊重し、その場を後にする。
……彼が泣きじゃくる自分よりも年下の召喚師の少女を見て召喚師ばかりに重しを負わせる状況を憂いミヘンセッションへの参加を決めたのは別のお話。

あれから数十分、リアニは声を殺しながら泣きに泣いた。
彼女がこれほど泣いたのは師匠に拾って貰った時以来であった。
理不尽すぎる世界をエボン教を恨みそうになりかけたその時に拾って貰った時は嬉しさのあまりに言葉を失くしたほど涙を零したのだ。
だが、今流れる涙がその時の綺麗な感情とは真逆、ただ皆の笑顔を守りたいとそれだけを思っていたはずなのに……アルベドだからダメなのかと負の感情が彼女から湧き出てくる。
そして彼女は見てしまう。
窓の外にいる数人のガードに付き添われた少女を。
少し距離が離れているせいであまり会話が聞こえないが、おそらく初めての召喚獣の契約をこれからしに行くというのと少女が―ユウナ―という名前だというのは分かった。

ユウナ、シンを倒した大召喚師ブラスカの子供の名前と同じである。
ガードの数とさらにそれを囲む村人の数から考えておそらく本人。

「っく、わたしなんてことを……」

唇を血が滲む寸前まで噛んで、自己嫌悪に陥るリアニ。
彼女は今こう考えたのだ。
―失敗してしまえばいい―と一瞬だけだが、そんな感情が湧きあがったのだ。誰にも期待されなかった自分に対し、期待されているユウナに羨望を抱いたのだ。
自分から出た暗い感情により一層リアニに精神は打ちひしがれる。
こんな感情を持っているから召喚獣は契約をしたがらなかったのだと悪い方悪い方にと考えが流れていく。
止まりかけた涙が再び溢れ、リアニは再び眠りへと吸い込まれていった。

それからリアニが再び目覚めたのは次の日の夜であった。
体の疲労が思ったよりも酷かったのだろう。

「う…、また眠ってたんだ」

言葉とともに、リアニは先よりもゆっくりと体を起こす。先の頭痛を警戒していたのだろう。
だが、幸いにも頭痛は微塵も起こらず。リアニはすんなりとその身を起き上がらせることに成功した。
しばらくぼーっとするも、特に体の不調は無い。
そして、眠りに落ちる前まで抱いていた感情も眠ったことで落ち着いたのか、大分緩和されていた。

「よいしょっと」

取り敢えず、ここに居てもしょうがないのでリアニはベッドから出る。

幸いにも荷物は全て、脇にまとめられていた。

休む場所を与えてくれた討伐隊の人へ礼をしようと、リアニは討伐隊の宿舎を見て回るが、何故か一人も居ない。

「あれ？そんなに夜遅くないと思うけど……どうしたんだろ？」

そう首を傾げながら、リアニが討伐隊の出入口まで近付くと、ある事に気付く。

「なんか外が騒がしい……お祭り？」

リアニが祭り囃子につられ、討伐隊宿舎の外へ出ると、彼女の予想通り、村はシンの恐怖を忘れたかのような騒ぎとなっていた。

その祭りの中心にいるのは……。

リアニが眠りに落ちる前に見かけただけの少女、おそらく大召喚師ブラスカの一人娘。

ユウナ。

彼女は村人達からの笑顔を一身に受け、本人もそして彼女を守るガードもまんざらではない表情をしている。

村人、ユウナとそのガードの表情を見るにユウナはこのビサイドの寺院に祭られた召喚獣ヴァルファーレとの契約を無事に成功させたのだろう。

思わず、忘れかけていた嫉妬の感情が噴き出しかけてが、それよりも先に別の感情が彼女を支配した。
それは怖気だ。

何故、村人もユウナもガードもあんな笑顔を浮かべてられているのか、リアニには理解できなかった。
召喚師行く末は誰もが知ってるはずだ。
自分はシンを倒す新たな方法を模索する異端の考えから召喚獣を欲する例外だが、大召喚師の娘ならそんな考えには至るまい、ならば究極召喚を手に入れるためにユウナはその命を散らすつもりなのだろう。
そして、それを受け入れているガードと村人達。
その輪に加わらず外からそれを見たリアニにその光景は、

あまりに狂っていた。

千年も続いたその狂気に、エボンの民は気付かない。
大召喚師がシンを倒し、ナギ節をもたらし、エボンの民の罪が全て贖われていた時に、姿を消す。永遠のナギ節を迎える。
召喚師だけに背負わされた使命。
ユウナを祝福し、シンを打倒すことを期待するということは、ユウナの死を受け入れるのと同義。
だが、それに皆が気付かない。エボンの教えに敬虔だからこそ気付かない。信仰という名の狂気。

「うっ」

狂気に怖気を覚え、やがてそれは吐き気に変わる。
幸いにも胃の中が空だったために吐くことはなかったが、胸のつっかえがなくなることはない。

自らの手で胸を擦り、リアニはそこで顔を上げる。

「っ！？」

まるで時が止まったかのような感覚をリアニは感じていた。
息を呑みリアニは顔をあげたままの位置で固定していた。
今、リアニは多くの人達をすり抜けてきたユウナの視線を自らの視線と交差させている。

（この子、分かってる……例え、旅の目的が達成されても死ぬことも、……そしてそのナギ節が僅か数年で終わってしまう可能性があることも）

エボンの民が自分に期待を抱いている間はエボンの民は希望を胸に今を生き、やがて来るかもしれないナギ節に胸を高鳴らせることができる。

「――――――――――」
「――――――――――」

無言で見つめ合う二人、ユウナもリアニの瞳に宿る感情が分かったのだろう。
ユウナを見つめるリアニの視線にはビサイドの村の人々とは違う憐れみのような憐憫のような感情が込められていた。
他の村人達の縋る様な視線とはまるで違うそれをユウナは敏感に感じたのであろう。
さながら白い紙に落とされた一滴の墨のようにユウナには映ったのかもしれない。
しばし無言で二人は見つめ合っていたが、リアニの方が視線を逸らす。

いや、それだけではない。まるで逃げるようにその場を走り去る。

「あっ」

ユウナの驚く様な引きとめる様な声はリアニの耳にかすかに届いた。

「あっ」

ユウナは知らず、言葉を漏らしていた。
村人達とは違う悲しみのような怒りのような視線を送っていた少女と無言で見つめ合っていたが、少女の方が突然踵を返すと祝いの場を後にしたのだ。
思わず追おうとしたが、それが追うことは出来なかった。
一歩踏み出した足は、姉のように慕う女性の言葉で止められた。

「ユウナどうしたの？」
「えっ、う、ううん何でもないです」

女性―ルールルー―の問いに取り繕うユウナ。
そんな事をしている間に、リアニはユウナからは見えなくなってしまった。

「はぁ～」

なんだか溜息を吐いてしまうユウナ。それほどリアニの視線はユウナにとって新鮮なものであった。
声をかけられなかった事を悔いるほどに。

「優勝！優勝！優勝！優勝だ！！」
「やれやれよね」

ユウナの溜息をルールーはビサイドオーラカのメンバーが騒ぐのを見て吐いたものだと勘違いしていた。

リアニは息を荒げて峠の遺跡までやってきていた。
エボン教の民ならお祈りの一つでもするところだが、リアニはあいにくエバン教の民では無い。
不信心にも極まりないが、遺跡に背を預けて息を整える。
あの祝いの席の中にリアニはこれ以上居られなかった。居たくなかった。
家を飛び出す前から召喚師のみに負担を背負わせるエボン教なんて嫌いだった。
召喚師として修業をつけてくれた師匠はそんな自分を忌避することなく召喚術を教えてくれた素晴らしい人だった。だからエボン教の歪みをスピラの歪(いびつ)さを理解しているつもりだった。
だが、実際に見たあれはリアニの想像を超えていた。

千年もの間、人々に死そのものであったシンはここまで世界を歪めていたのだ。
だから逃げた。
歪みから目を逸らすという理由を付けて、本当は耐えられなかったのだ。
妄想にしか過ぎない、ユウナから責める様な視線を感じた気がして。
召喚師に成れなかった自分が情けなくて。
再びリアニの喉が震える。涙腺が熱くなる。
遺跡から見えるビサイドの村の明かりが、見た目よりもずっと遠くに感じた。

リアニはそのままそこで夜を明かした。
幸いにもここの土地の魔物は弱い、たっぷり眠っていたこともあって体力が十分に回復したリアニに一晩の徹夜位は屁でもない。魔物に怒りをぶつける様にリアニは愛用の武器の鎌を振り続けた。
日が昇る頃、リアニはキーリカへと向かう連絡船リキ号へと向かうことにした。
ビサイドの寺院の召喚獣との契約に失敗した今、ここに留まる理由は無い。
師匠に一度会って指示を仰ぐことにしたのだ。
長年の目標が最初の一歩で崩され、リアニは完全に迷っていた。
ただ今は、自分の事を理解してくれた師匠に合いたかったのだ。

「し、しまった……」

だが、リアニは完全に失念していたことがあった。
ビサイドの寺院で召喚獣との契約を済ませたユウナが次に向かうのはキーリカ。そしてその連絡船はこれ只一つ。
同じ船に乗るのは必然だった。
思わず自分の短慮からどもるリアニ。
幸いにも二階の展望台に居たので、ユウナに見つかることはなかったが、下手に動くことが出来ず。リアニはそのまま二階に留まっていた。

「ってかガード多くない？ひのふのみのよ……四人？こちとらガードも居ないよ」

一人で家を飛び出した挙句、アルベド族を秘密にしているのでリアニにはガードはいない。
そもそもシンを召喚術で倒そうとしていない召喚師に付くガードが居るはずもなかった。
そのまま、バレないようにこっそりとユウナを観察していると、連絡船に乗り合わせた人達がユウナの正体に気付く。
大召喚師ブラスカの娘、ユウナ。
ユウナという個人を見ずに、大召喚師の娘として接して拝む人達にリアニの表情は曇る。

「……可哀そうだよな。親が有名だと」
（……へぇ珍しい人ね）

リアニの真下らへんぎりぎり見える辺りにいる金髪の珍しい恰好の少年の呟きがリアニの耳に届く。
その言葉は、昨日からささくれた心を少しだけ癒してくれるほど、スピラでは珍しい意見だった。

金髪の少年―ティーダ―とユウナが船の真正面に立ち二人きりで話をしている。
こうして遠目に見ているとティーダと呼ばれた少年の異質さが目に付いた。
来ている服もそうだが、纏う雰囲気がスピラの民とまるで違う。
シンにより死が蔓延し、閉塞しきったこのスピラでは清々しいまでの青臭さ、見果てぬ未来へと駆け抜けようとする若い力に漲った少年。
少年の放つ力強き覇気はリアニの忘れかけた目標を思い出させるのに十分であった。
思わず、微笑んでしまった彼女だったが、その微笑みは次の瞬間に失せる事になった。
連絡船が突然真横に煽られる。

「水中衝撃波っ？」

リアニは手すりに体を預けて何とか転落を免れる。
腰にめり込む手すりにより痛みが起こるがそれを気にするほどリアニに余裕は残されていなかった。
衝撃が来た方向を見ると水面が津波のように盛り上がる。
それは津波では無い。津波の頂点からは硬い質感の生物のそれが姿を見せる。全容は見えぬほどの巨体だが、それは魔物以外の何物でもなかった。
それを見た船員達は、恐怖から悲鳴のような大声を張り上げてそれの名を呼んだ。

「シーーーーーーーーーーン！！！！！！！」

スピラ最大の魔物にして、死の象徴、シンの姿がそこにはあった。

シンに船に取り付けられていたアンカーが突き刺さる。
船の船員はシンが今まさに襲うとしている街、キーリカの民だった。
シンの注意を引き付けるためそれをユウナのガードは拒んだが、ユウナがそれを了承したのだ。
勢いよく突き刺さったそれはシンにとって針も同然の大きさだが、痛みを与えられたのが気に障ったのか、シンはカラダの表面の鱗のようなものを無数に船へと飛ばす。
シンのカラダは例え一部が取れようとも、それ単体が魔物としての属性を持つという厄介極まりない特性を持つだのだ。
本体の意を汲んで鱗達―シンのコケラ達―は街を破壊しようとする本体を邪魔する外敵を排除せんと勢いよく襲い掛かる。
船の甲板に突き刺さる様に降り立ったコケラ達は鱗のような形態から羽虫に似た形態へと変化する。

「うわあああ」
「ひぃいいい」

見境なく襲い掛かるコケラ達にユウナとそのガードは力無き人達を守るためにめいめいの武器を取り出して、戦い始めた。
だが、個々での戦闘はそこそこだが、チームでの戦闘経験が少ないのか、いまいち連携が取れていない。リアニも自身に迫るコケラを二階で相手取ってはいたが、開けた場所故にユウナ達に敵が集中していた。
そうこうしている間にユウナの背後に一体のコケラが舞い降りた。

「ちっ！」

顔を見せるのは躊躇われたが、見捨てることなどリアニには出来ない。
少なくともユウナはスピラを救いたいと思っているのだから、自分の命と引き換えに訪れるナギ節が永遠のナギ節になるのを夢見て。

「ユウナ！」

ロンゾ族の青年、キマリが何よりも優先して守るべきユウナの背後にコケラが迫ったのに対し、大声を張り上げる。ここで彼女を失っては彼は生きる意味そのものを失ってしまう。それゆえの咆哮。
コケラの鋭い爪がユウナを切り裂こうしたその瞬間。
まるで雷撃のようにその少女は現れた。
コケラは真上から斜めに切り裂かれ、瞬く間にその活動を停止に追い込まれる。

「ったく！見てらんないわね！」
「あ、あなた……！？」

ユウナは目を剥いた。
昨晩、不思議な視線を送っていた少女がいきなり真上から現れて自分の危機を救ったのだ。それは致し方ないことではあった。

「話は後よ！」

リアニは更に自らの獲物である鎌で敵を切り裂いた。

「はい！」

ユウナはリアニの言葉に勢いよく頷くと、後ろへと一端下がる。
リアニの登場により、コケラ達が混乱し、一時的に攻撃が止んだのだ。
これでメンバーの中で一番の攻撃を誇るユウナの召喚術が可能になった。

「力を貸して、ヴァルファーレ！！」

ビサイドの寺院から飛び出したヴァルファーレは大空を切り裂き、契約者たるユウナの元へと瞬く間に現れた。
一撃でコケラ達を粉砕するヴァルファーレとその他五人の力をもってすれば、コケラを一掃するのにさほど時間はかからなかった。
そしてコケラ達を屠ったヴァルファーレはその闘志を為に貯めていた。

「ヴァルファーレ！シューティングパワー！！」

ユウナの意思を受けてヴァルファーレが高く飛び上がる。
髪にも見える鬣を円を描く様に振るうと輝く魔法陣が空中へと現れた。
その魔法陣に向かってヴァルファーレは口から光線を吐き出した。
光線は魔法陣を通ると無数に別れ、シンの背びれに吸い込まる様にぶつかり大爆発する。

「よぉし！」
「やった！」

ビサイドオーラカのユニホームを纏った男性―ワッカ―と、ティー

ダがそれぞれガッツポーズをとる。
だが安心するのは速すぎた。
背びれに穴を開けられて、シンがその体を痛みから捩じらせる。
アンカーがシンと繋がった船にその動きは拙かった。
ユウナがバランスを大きく崩して、船をからその身を投げ出してしまう。

「えっ？」

呆けたような声をあげるユウナに反応できたのは僅かに二人、キマリとリアニだ。
リアニの方がキマリより先にユウナへと手を伸ばした。
ユウナの手を掴むとリアニはその体を入れ替える様に体を大きく回転させる。既に船から離れたユウナにリアニがそれを行えば、今度は逆にリアニのその体が船の外に出るのは必定。
ユウナをキマリがしっかりと受け止めたのを見届けたながらリアニは海中に吸い込まれていった。

海の中はシンが泳ぎ回ったせいで海流が乱れに乱れていた。
なんとか海面に出ようとするが、不幸にもリアニが丁度落ちた場所は海水が深く潜り込む流れが生まれているところであった。
視界には彼女と同じく投げ出されたのかティーダの姿があったが、それを助ける余裕は彼女には無い。
アルベド族は元々、海中から機械をサルベージしている為、他の種族よりも長い間、水中に潜っていられるが、数年間召喚師の修行をしていた為、リアニは長らく水中に潜っていなかった。
平均的なスピラの民よりは潜っていられるだろうが、楽観できる状

況では無い。

（ま、まずっ！この流れから逃れない事には、本気で死ぬっ！）

体をよじって流れから逸れようとするが、シンにより発生した海流は生半可な流れではなくリアニはなす術もなく沈んでいく。

（ごぼっごぼ！う、こんな、ところで……）

やがて息苦しさよりも、水圧が体を攻め立てる頃、リアニの意識は急速にフェードアウトしていく。

目の前が幻覚なのか真っ白に光り輝いている。

「……？……！……！！」

光はまるでリアニに問いかける様に明滅していた。

もうリアニには何も考えられない。

「……お前はどうしたいんだ？」

（あたしは……）

意識が遠のくのと反比例して光の言葉がはっきりとリアニに届く。

（あたしはこの世界を変えたい）

「お前はどうしたいんだ？」

（常識を過去を全て変えたい！）

「全てをかける覚悟があるか？」

（ある！シンを完全に倒せるのならなんだってかけてやる！）

「そうか……なら我が名を呼べ」

（名前……？）

「我が名は……」

肺に残った空気が溢れだす。代わりに海水が入り込みリアニは激しく苦しんだだが、それを気にしている場合では無い。
何かに突き動かされるようにリアニは叫ぶ。声無き叫びを、魂の叫びを。

（来なさい！！マジックマスター！！！！）

海面が爆発し、一人の少女を腕に抱いた。
失われた祈り子マジックマスターが数百年振りにその姿をスピラに現した最初の戦いの始まりだった。

あたしはこの世界を変えたい（後書き）

メーガス三姉妹が居るなら他のモンスターが出てもいいじゃない！をコンセプトにマジックマスターを登場させてしまいました。
とは言ってもオリジナル召喚獣をたくさん出してもしょうがないので基本、オリジナル召喚獣はマジックマスターのみと考えて頂ければ幸いです。
ちなみ名前はマジックマスターですがファイナルファンタジー６の彼とは一切関係がありません。あくまで名前のみです。
ゴルベーザも候補でしたが、そうなると人格まで投影してしまうので、先入観がないマジックマスターの名を使用する運びとなりました。
魔法を極めた召喚獣―故にマジックマスターなのだと考えて頂ければ幸いです。

次回はいきなりシンとマジックマスターがぶつかります。
お楽しみに。

魔法を極めるという意味、教えてやろう（前書き）

あけましておめでとうございます。
遅くなりました。第二話です。

魔法を極めるという意味、教えてやろう

ワッカは焦っていた。
ヴァルファーレの攻撃を受けたシンの渾身の抵抗は船にとてつもない衝撃を与えていた。
幸いにも船が壊れるという最悪の事態はなんとか避けられた。
だが、波が収まった甲板に自称ザナルカンドから来た妙にブリッツボールが得意な少年―ティーダ―の姿が甲板の上に無かったのだ。
慌ててワッカが海に飛び込むと、運がいいことにティーダは割と近くの水中を漂っていた。
思わず苦笑するも、ポーションを使ってティーダの体力を回復させる。
ポーションの使用されたことでティーダは目を覚ます。
辺りを見回すティーダにワッカは思わず苦笑してしまう。どうやら思ったよりも元気そうだ。
だが、ティーダは突然目を見開き、海底に向かって勢いよく泳ぎ始めた。
ティーダの思ってもみなかった奇行にワッカは驚くも、その後を追う。
このティーダが基本的に良い人間だが、シンの毒気を受けたせいかどうにも言動がおかしくなることがあった。
今回もそれの類だとワッカは判断したのだ。
しかし、ワッカの予想は大きく外れた。
自称とは言えザナルカンドエイブスのエースと称したティーダの泳ぎはワッカのそれを遥かに凌ぐ、とても追いつけないそれにワッカが苛立ちを覚えた頃、ワッカにもティーダが急ぎ海底に向かおうと

している理由がわかった。

（ちっ！そういうことかよ！）

思わず心中で毒づくもワッカも自身が持てる全力の力でティーダと同じ目標に向かって泳ぎ始めた。

彼らの視線の先には、乱れた海流によって海底に引きずり込まれようとしてるリアニの姿が映っていた。

リアニ自身がなんとか海流から逃れようとするものの、まるで滝つぼに飲まれた木の葉のように彼女は無力であった。

その時、リアニの様子を見て歯噛みする二人の前に巨大な影が現れる。

シンのコケラ・エキュー。

ヴァルファーレの攻撃で砕けた背びれの一部が姿を変えたクラゲ型の魔物。

無視するには危険すぎる敵にリアニを案じつつも武器を持って立ち向かうことしか出来なかった。

蒼く澄んだ海底に彼は長らく沈んでいた。

彼の名は召喚獣、魔法を極めし者、マジックマスターの祈り子。

数百年も前にシンによる攻撃で沈んでしまったとある寺院に祭られ

ていたものである。
ありとあらゆる魔法を行使する彼は召喚師だけに留まらず、多くの白魔道士、黒魔道士に崇められた存在だった。
その召喚獣としての格はバハムートすら凌駕していたという。
だが、それとは裏腹に聖都ベベルの地位の高い僧からは疎まれていた。
なぜなら、彼はただ一人の召喚師を除いて一度たりとも契約を許したことはなかったからだ。
多くの召喚師が彼を訪れ、契約を成功させられず、その中にはそのせいで召喚師としての道を挫折した者もいたほどだ。
彼が召喚師と契約を交わさないわけは、彼自身がエボン教から受けた仕打ちからだった。
マジックマスターはエボン教が嫌いだった。
だが、シンも許し難い存在だった。
召喚師と契約しなければいかに彼とてその力を行使できない。
故に、彼が偏に望むのはエボン教を盲信しない召喚師。
そんな彼が過去に契約したのは若い……少女と呼んで差しつかない女性のみ。
しかし、彼女は彼の目から見て間違いなく熱心なエボン教の信者だった。
自分の命をかけてシンを倒すことを本気で考えている愚かなほど真っ直ぐな少女……。
そんな彼女は最後にごめんなさい、と謝りながら死んでいった。
彼女の散り様はマジックマスターの心に深い傷として残っていた。
それからだ。彼がエボン教を嫌いになったのは……。
あんな死に方をさせるために彼女と共にあったわけではない。自分を差し出したわけではない。
エボン教を信じられなくなった彼だったが、シンと互角に戦った彼を放っておくことをエボン教の連中はしなかった。彼の意図とは裏腹に無理矢理に寺院を建てられて祀られた。

たった一人の少女すら守れなかった愚かな召喚獣を崇める人々の思いは彼の心を苛ませることしかしなかった。
だから誰とも契約しなかった。
エボン教なんて信じられなかったからだ。
そんな彼に……人々を救う力がありながらも何もしなかった彼に罰が下ったのだろうか？
彼の祀られた寺院はシンに襲われ島ごと、海中へと沈ませてしまった。
彼の条件を満たす者は長らく現れなかった。そんな中、誰かと契約する気が失せた彼に、それは渡りに舟であった。
そして、今、数百年の時を越え一人の少女が彼の前に現れた。

海底にも関わらずに現れた彼女は海難事故にでもあったのか、半分死にかけていた。
召喚師に召喚されなければ彼とてただの置物にしか過ぎない。
だが、少女には召喚師としての素養があった。

（偶然……にしても出来過ぎているが、放っておくことも憚れるな）

彼の矜持に従えば、エボン教を盲信する召喚師と契約することなどしたくはない。
だが、かつての契約者と同じ年頃の少女を見捨てる事が出来る程、彼は薄情ではなかった。

（おい、生きてるか？おい！目を開けろ！！）

なんにしても契約しない事には彼の力は全くと言っていい程使う事は出来ない。
故に彼はなんとか彼女の意識を確認する。
ぼんやりとではあるが、彼女は目を開く。

契約自体は簡単だ。彼女の意思を言葉を彼が汲めばいい。

（……お前はどうしたいんだ？）

（あたしは……）

彼は対して期待していなかった。

シンを倒したい、召喚師の望むことなど数百年経とうが変わりはあるまい。そうでないのなら彼の望む召喚師が彼がまだ失われた祈り子と呼ばれる前に現れていたことだろう。

だが、リアニの答えは彼が半ば確信していた答えを裏切った。

（あたしはこの世界を変えたい）

まさか……という思いと共に彼は再び問いかける。

（お前はどうしたいんだ？）

（常識を過去を全て変えたい！）

運命と言う言葉を彼は感じられずにはいられなかった。

（全てをかける覚悟があるか？）

（ある！シンを完全に倒せるのならなんだってかけてやる！なんだって利用してやる！）

カラダがないにも関わらず、まるで電流のようなものを彼は感じる。

（そうか……なら我が名を呼べ）

何百年ぶりであろう。

（名前……？）
（我が名は……）
自ら他者に名前を名乗ったのは……。
（来なさい！！マジックマスター！！！！）
新たな主の命に周囲の幻光虫を無制限に吸収し、肉体を構成する。
久しぶりの肉体に感じる海水は心地いい程の爽快感を彼に与えていた。
もはや、意識を失った召喚主を両手で抱えると彼は勢いよく海面に向けて上昇する。
「レビテト！」
音無き声が海水を震わせ、彼の体はまるでジェットのように急速に浮上する。
この世界のあらゆる生物よりも素早く海中を駆け抜け、爆発とも見間違えるほどの水しぶきをあげながらマジックマスターは空中へと飛び出した。
頬を流れ落ちる水滴の感触を心地よく感じたのか彼は目を細め、改めて自らの腕の中にいる少女を見て、慌てた。
高い水圧化に居た彼女がいきなり空中へと飛び出せば、血液中の窒素が気体化して体機能に重篤な症状を起こすことは必然。
リアニはまさに打ち上げられた魚のように痙攣していた。
「！？っおお！ライブラ！」
解析魔法で慌ててリアニの様子を確認するマジックマスター。
瞬時に瀕死状態であると看破し、回復魔法を行使する。

「フルケア」

淡い光が溢れ、瞬く間にリアニのカラダが癒されていく。

「う……う、あれ？」

「目ぇ覚めたか！？」

「？……誰！？」

ぼんやりとした意識が覚醒するなり見慣れない男にいきなり抱き抱えれているという状況。リアニでなくても慌てるのは当然だろう。命を救った相手に警戒される程悲しいこともそうないであろう。リアニを抱きかかえたままでマジックマスターは顔を顰めている。

「おい、命の恩人にそれはねぇだろうが」

「……恩人？」

「ん、恩人ってか……恩召喚獣か？俺の場合は」

自分の言葉になにか引っかかったのか、マジックマスターは首を傾げる。

自らの内で疑問を解こうとする彼に対して、リアニの反応は劇的だった。

「召喚獣……ってあなた召喚獣なの！？」

「おいおい……死にかけていたけど、自分で俺を呼んだだろう？忘れんなよ……」

マジックマスターの言葉に朦朧とした意識の中で呼んだ彼の名をリアニは思い出す。彼が告げ、彼女が紡いだ彼の御名を……。

「マジックマスター……？」
「ああ、俺の名だぜ」
マジックマスターはリアニの問いを肯定するとじろりとリアニを見つめる。
「な、何？」
マジックマスター自身は召喚獣と言っているが、その容姿は人間そのもの、痩身の若い男性のそれだ。
幻光虫の淡い光と赤みがかったその髪から、神秘的な美しさをマジックマスターは持っていた。
そんな彼に見つめられて、なんだかんだで年頃の少女であるリアニはこんな状況にも関わらず頬を赤く染める。
「さっきの言葉嘘じゃねぇよな？」
「さっきの……言葉？」
「ああ、この世界を変えるってとこだよ。お前はどういう意味でその言葉を口にした？」
真剣という言葉すら陳腐に聞こえる程にマジックマスターの瞳に宿る光には危ういほどの必至な思いが込められていた。
その光に見せられれながらもリアニは……自身の考えが異端と知りつつも包み隠さず思いを告げる。
「……本来とは違った方法でシンを倒す。例え機械を使ってでも……それを成す」
「ならばなぜ召喚獣を求めた？あきらかにお前は召喚師と修行しているだろう？」
「召喚師としての目線を知りたかった……機械と召喚術、両方歩み

寄れば別の力になるかもしれない。あくまで手段よ」
召喚獣を崇め、共感し、その力を借りるのが召喚師としての有り方にも関わらず、堂々と手段と言ってのける彼女にマジックマスターはプルプルと体を震わせた。
リアニは流石に歯に衣着せすぎなかったかな、と後悔はしなかったが反省した。

「くっくく、はははははは！！我ら召喚獣を手段だと！？」
「う、うん」

ひとしきり笑うと額が触れる寸前まで顔を近づけて問い詰めるマジックマスター。
リアニは思わず上ずった声をあげるも素直に肯定の言葉を口にする。

「ああ、てめぇは面白れなぁ！いいぜ、使いたいだけ使って見ろよ！このマジックマスターをよ！！」
「い、いいの？」
「ああ、いいぜ。その代わり……」

依然笑いが抜けないのか、くくくと言葉の端に笑いを滲ませマジックマスターは自らを道具として使う代わりの対価をリアニに要求する。

「……その代わり、になに？」

召喚獣の価値観がいまいち分からず、何を言われるか分からず微妙に怖気づくリアニ。
要求はそんな彼女の予想の範疇を越えていた。

「お前に俺が使いこなせたらな、話はそれからだぜ？」
「は？ってそれだけ？」
「ああ、それだけだ」
「……簡単そうね」

召喚獣は契約さえできれば召喚獣は基本的に契約者の意のままに操ることができる。
それを知っているからこそリアニはマジックマスターが提示した条件があまりにも簡単すぎて拍子抜けしてしまったのだ。

「その言葉後悔するなよ？……というか俺はなにをすりゃあいいんだよ？」
「え？」

やけに真剣な顔をしてマジックマスターは周りに視線を飛ばす。
そしてリアニもマジックマスターの顔が離れたことでリアニに状況を理解する。
彼らはシンのコケラにすっかり周りを囲まれていた。

「とりあえずこいつらをぶっ殺して、あとはあれを止めればいいか？」
「う、うんお願い……できるの？」
「まぁな。……多分、追い払うくらいはできるだろ……お前が死にかけるかもしれんが」

最後にリアニにとって物騒極まりない言葉を呟くが、空中という未だかつて来たこともない場所で念願の召喚獣に抱き抱えられたあげくに視界にはシンがキーリカを襲わんとしているのが見えるという予想だにしない緊急事態に幸か不幸かリアニにはそれは聞こえなかった。

「サンダガ！！！！！！」
雷の雨がリアニの視界を埋め尽くし、瞬く間にシンのコケラを殲滅する。
「振り落とされんなよ！」
「え？ってきゃあああああ！！」
風を切り裂くようにマジックマスターは空を飛び、シンへと追い縋る。
「ちっ！……間に合わない」
マジックマスターは誰に聞かせるでもなくそう呟くと、片手でリアニをしっかりと胸に抱き、もう片方の手で天を指さす。
そしてその天からシンへと指を向けて一言。
「コメット」
その瞬間、空からの隕石がシンへと激突する。
それを見るとマジックマスターは何度かそれを繰り返し、いくつもの隕石を降らせる。
だが、一度目はシンの外殻まで着弾したそれも何度目かには外殻にすら当たらず、不可視の何かに弾かれる。
「重力操作で防ぎやがった……相変わらず腹立つ奴だな」
「むぐぐ、な、なに？」
風圧でマジックマスターに押し付けられる形になって少々しゃべり

ずらそうなリアニ。
なんとか顔をずらすと、猛然とキーリカを目指すシンが見える。
シンはマジックマスターの言う通り、重力操作で障壁を作り出し隕石操作魔法コメットを防いでいた。
だが、それでも数発喰らったのは確かなはずなのにダメージを受けた様子はない。

「ん？」

そんなシンの背中の異変にリアニが気付く。
シンの甲殻類に近い外殻がざわざわと動き、無数の瞳が現れ、こちらを凝視していた。

「ち、グラビラ！！」

マジックマスターが右手を振るい無数の重力球を前方へと放つ。
すると、シンもリアニには感知できない不可視の重力弾を放っていたのか、マジックマスターのそれとぶつかり合い、圧縮された空間を解放し合って、辺りに暴風が吹き荒れる。
「足止め程度にしかならんがしょうがない！トルネド！」
「――――――――――――――――――――――――――――！！！！！」

マジックマスターの言葉と共にシンの両脇に巨大な竜巻が現れ、シンを挟みその動きを抑え込む。
竜巻はがりがりとシンを削り、シンは口を開き苦悶の声をあげていた。
その隙を付いてマジックマスターは空を駆ける。
だがシンも伊達に最強の魔物と呼ばれているわけではない。

「――――――――――――――――――――！！！！！」

シンは自らの本能に訴えかける文明、街を破壊するという衝動のままにキーリカへと進まんと強引に竜巻の鎖を引き千切る。
天を貫く様にそびえていたニ柱の竜巻が吹き飛び、その余波で生まれた突風に煽られるマジックマスター達。

「くっ！？予想より早い！」

荒れ狂う大気の中なんとか彼は姿勢を保つが、そうこうしている間にシンはキーリカへと到達し、その体躯と重力操作で生み出した巨大な津波で街を飲み込まんとする。

「ちょっと！ま、不味いわよ！」
「ちっ！……少々三半規管がイカれるかもしれんが、まぁ我慢しろよ」
「え？」

どう考えても物騒極まりないことをさらりとマジックマスターは呟いた。
そしてリアニが返事をする前に、マジックマスターは魔法を構築するとすぐさまそれを唱える。

「テレポ」
「きゃあああああ！！？な、何ぃぃぃ！？」

突然、視界が歪みそれと共にそれを飛ぶのとは違う浮遊感というか無重力感がリアニを襲う。
思わず危険なものが口から流失しそうになるのを何とかリアニは我

慢する。

「うぷぅ！……頭がグラグ……らぁぁ！！？」

リアニは凄まじい眩暈と嘔気をなんとか堪え、正面を見据えると体調不良を吹き飛ばす程の光景を目の当たりにすした。

なんと先程までシンとはかなりの距離を隔てていたにも関わらず、ほんの数瞬でシンの真ん前に来ていたからだ。

と言うか……。

「つ、津波ぃぃ！ど、どどどうすんのよマジックマスター！？」

何十メートルもあろうかという巨大な津波がその牙を振るわんと迫ってくるではないか。

自らの召喚獣に縋る様に焦りまくるリアニ。

端も外聞もないほど取り乱し色々な液体が顔から溢れていた。

「焦るな……ブリザガ！！」

そんなリアニを左手で抱き抱え、マジックマスターは空間を切り裂かんばかりに右手を無造作に振ると魔法を解放する。

唱えるは氷結魔法の最高威力を誇るブリザガ。

もちろんマジックマスターが唱える其れは人のそれを遥かに越える威力をもって津波を凍てつかせ、進撃を食い止めんとする。

だが、シンの重力操作から生まれたそれもまた凄まじい勢いを持って凍る先からそれを乗り越えんと突き進む。

「ちっ！……やはりまだ全力とはいかんか、なら！！ブリザガ、ブリザガ、ブリザガァ！！」

マジックマスターは顔を悔しげに歪めると、次から次へと氷結魔法を連発する。
津波は見る見る内に勢いを弱め、何事かとようやく出てきたキーリカの住民の目に触れる。

「シ、シンだあああああ！」
「いやあああ！！」
「逃げろ！高台まで逃げろ！」

事の重大さに即座に気付いた住民達は召喚獣を祭ってある高台の寺院まで我先にと逃げていく。

「……よ、良かった」

住民の避難と津波がもはやその動きを止めた事を確認しリアニは安堵の息を吐く。
しかし、その顔色は些か以上に悪い。

「まだ安心するのは早いぞ。まだシンがいる。あいつをなんとかしないとな」

凍てついた津波の向こうのシンを鋭い視線を飛ばし、リアニの気を引き締める。
シンは何故か先程のまでの凶暴さが鳴りを潜めたように動きを止めていた。

「……そうか、お前まだ」

シンの様子を見てマジックマスターは悲しげな表情を浮かべた。

「おい主」
「な、何よ……あいつ追い払わないと」
何事かを決意し、リアニに声をかけるマジックマスター。
声をかけられた彼女はぜいぜいと荒い息を吐いているが、瞳の光は消えていない。
「ちょいと辛いが我慢できるか？」
「それで皆を守れるなら、やってマジックマスター！」
「……ち、ああ……似てやがんなぁ畜生」
「何を？」
「何でもない。気にするな、見てろよ。魔法を極めるという意味、教えてやろう……テレポ」
「あんたそれ……うわあああああ！？」
シンの右手、遥かに離れた距離にマジックマスターは姿を現した。
リアニを腰に抱きつかせ、瞳を瞑り今日初めて集中状態に入る。
「根源にして終着」
マジックマスターが魔力をただ練るだけで、リアニは自分の中の何かがごっそりと吸い取られていく感覚を感じていた。
顔色が今まで以上に蒼くなり、思わず気を失いかける程に体長が悪化していく。
それでも彼女は自身の召喚獣たる彼がなさんとしていることを見届けんと気力だけで辛うじて気を失わんと踏み止まる。
「最奥にして頂点」

マジックマスターの左手が目の前の空間に光る円を描き、その円がとんでもない魔力を発している。

「全ての物が、ただそこへ到達せん」

右手を振りかぶる様に構え、渾身の魔力を込めるマジックマスターは詠唱が終わるタイミングで瞳を大きく見開きその光の円の中心に己が右手を叩き付ける。

「アルテマ！！！」

何の属性も付加されていない究極の名を冠する白い極太の光は空気を熱し尽くし目標たるシンを飲み込まんと突き進む。
シンは未だに呆然としたままで身動きせずにその光を無抵抗に受け止める。
ジリジリと外殻を熱せられているにも関わらず、シンは対した反応を見せなかった。
しかし、そのままシンを飲み込まんとしていた光は唐突にその威力を弱めてやがて消えていく。

「はぁはぁ……まぁこいつの力量ならこんなもんか」
「きゅ～」

滝のような汗を流し、マジックマスターは白目を剥いているリアニを見て苦笑する。
未だシンが健在にも関わらず、警戒心が妙に薄いマジックマスター。
シンはそんなマジックマスターの元へ、煙を噴く外殻そのままに突き進む。
そのスピードは己を傷つけたものに対する報復の意思を何故か感じない。

マジックマスターは主を大切そうにお姫様抱っこしながらそんなシンを見つめる。
やがて二者の距離はゼロになり擦れ違う。シンはマジックマスターに何もせずただ素通りするだけだった。

「じゃあな……御同輩」

シンにそう呟くマジックマスター、かつての契約者をシンとの戦いで失ったとは思えないほどの寂しさや悲しさ、そして何より同情が込められた言葉だった。

魔法を極めるという意味、教えてやろう（後書き）

次回はルールルーねぇが登場します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7287y/

それは彼女の物語

2012年1月6日00時47分発行